



## 美しい写真を生み出す 青森のタムロン・レンズ工場へ

全国有数のりんごの産地として知られる青森。  
“津軽富士”と呼ばれる岩木山、迫力あるねぶた祭など  
雄大な自然と伝統が息づくこの地に、その工場があります。

photo: Yukikazu Ito

タムロンといえば、1950年から革新的な設計で高品位なレンズをつくり続け、プロも厚い信頼を寄せるレンズメーカー。中国とベトナムに大規模な量産工場があり、グローバルな生産体制をとっています。それを統括しているのが、青森の弘前、浪岡、大鰐にある3つのマザー工場。この雄大な自然のなかで質の高いレンズをつくり上げているタムロンのスタッフに、その秘密を訊きました。

レンズの品質を保つ  
各工程のこだわり



原器製造

研磨機を使い、光学レンズの基準・原点となる原器を研磨。精度を追及するために研磨の音や表面の状況を把握し、仕上がりを調整。



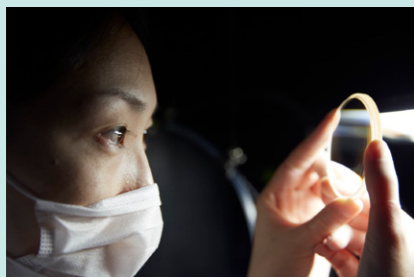
レンズ芯取り

レンズの中心を基準として、レンズの外周を完全な円に仕上げる芯取工程。0.002mmの範囲で調整する技術もマンツーマンで指導。



コート蒸着

レンズに入る光の反射を防止するためのコート工程。高真空状態で薬品を蒸着。17年目の山本伸哉さんの信念は「品質を守ること」。



レンズ接合

光学性能を向上させるため、材質の異なるレンズを接着する11年目・古村咲子さん。「最終的には人間の目で精度を上げていきたい」。

現状に満足しない

メーカーなので量産性は大切ですが、早さだけでなくひとつひとつより良いもの、お客様に満足していただけるものをつくりたい。「できない」は禁句。要望にどうすれば実現できるかを常に考えています。

チームでつくる

ひとりで集中する作業もありますが、注意点など仲間と情報共有して進めています。また図面通りでも、形にしたときに満足いく仕上がりにならないこともありますから、実際に現場へ足を運び議論を重ねることも。

人の手と目にこだわる

機械によって最新技術の導入や量産が叶えられますが、人の手の感覚や、目視でなければ繊細な調整が難しいところも多くあります。作業中は神経を集中して、不良を見逃さない。それを大切にしています。



工場のある浪岡の街が一望できる「アップルヒル」で一堂に会すタムロンのスタッフ。

1年目  
成田至さん

1年目  
前山真太郎さん

9年目  
村上素子さん

45年目  
成田ひろおさん

15年目  
千葉健二さん

9年目  
前田良太さん

そこで出会ったのは、  
技を極めチームで挑戦する  
ものづくりの原点でした



SP 45mm F/1.8 Di VC USD  
(Model F013)

キヤノン用、ニコン用、ソニー用(※)

絞りの開放値がF1.8と明るいレンズ。美しく滑らかなボケ味やクリアな描写力も魅力的。手ブレ補正機構「VC」を搭載し、スナップ撮影や、現行のレンズクラス最高の接写撮影も。P25の写真もこのレンズで撮影。

技術伝承。レンズの基準となる原器製造を担当する前田良太さんと成田至さんも、技術を引き継いでいる最中です。「研磨って、一人前になるまで10年かかることもあるんです。私も研磨機の正常な音を聞き分けるのに苦労しました。後輩には諸先輩方の築き上げてきた技術を継承してほしいし、それを伝えていくのが我々の務めだと思っています」(前田)

「自分もレンズを1からつくってみたいと思って入社を決めました。やってみるとやはり難しいですけど、明るく接してくれる前田さんと先輩方と一緒に、頑張っていきたいです」(成田至)

私たちの思いや感動を美しく写し撮るそのレンズは、実直なものづくりを極め、チームで挑戦する人々の手によってつくられています。



生産に不可欠な治工具を製造する成田さんと、真剣に見つめる千葉さん。緻密な削り作業を手早く行う様子は、まさに熟練の技。

「仕事をやるうえで大事にしている言葉があるんです。できないではなく、どうすれば実現できるか。っていう。いつも同じことばかりやっていないで、こうすればできるんじゃないかと、考えながらやっています」と語るのは、この道45年のベテラン・成田ひろおさん。その技術を引き継いでいるのは、マンツーマンで教えを受ける千葉健二さん。「上司というだけでなく、親のような存在ですね。技術を細かく教えてもらったり、背中を見ながら覚えていきます。要求された仕事を、それ以上の形に仕上げたい。そんな気持ちで取り組んでいます」。

デジタル一眼レフカメラの「眼」であるレンズは、精緻な仕上げりと精度が求められます。そのレンズ製造においてタムロンが大切にしているのは、最新の機械による高い生産性だけでなく、機械を扱う人の手や目、そしてその